平成 30 年度

第１回
地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会

議事録

平成 30 年５月８日（火）

第１回　地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会　議事録

１　開 催 日 時　　平成 30 年５月８日（火）　午後１時 30 分から午後３時 30 分まで

２　開催の場所　　県庁別館９階特別第一会議室

３　出　席　者　　委 員 長　　矢野　弘典
副委員長　　池上　重弘
委　　員　　片野　恵介
委　　員　　加藤　暁子
委　　員　　清宮　克幸
委　　員　　杉　　雅俊
委　　員　　豊田　由美
委　　員　　仲道　郁代
委　　員　　塙　　博
委　　員　　宮城　聰
委　　員　　渡部　清花

知　　事　　川勝　平太

４　議　　事
（１）副委員長選出
（２）平成30年度の検討事項及び年間スケジュール（予定）
（３）「知性を高める学習」の充実（確かな学力の向上）
（４）その他

【開　　会】
事　　務　　局：　ただいまから平成30年度第１回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を開催いたします。
本日はお忙しい中、御出席をいただきまして誠にありがとうございます。
私は､本日司会を務めます文化･観光部総合教育局の長澤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。
はじめに、お手元の次第が綴じてある資料を御覧ください。
３枚めくっていただきますと、１ページの「資料１　地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会設置要綱」がございます。
当委員会の委員の任期は、第４条第１項の規定のとおり、委嘱の日から当該年度の末日までとなっております。このため、昨年度から引き続きまして、全ての委員の皆様に再任をいただきましたが、改めて委嘱状を交付し、お手元に配付してございます。御確認をお願いいたします。
また、当委員会の委員長は第５条第２項の規定に基づきまして、知事

の指名により、矢野弘典委員にお願いをしております。よろしくお願いいたします。

次に、資料を１枚お戻りいただきますと、実践委員会の委員の一覧がございます。

本日は、白井委員、竹原委員、藤田委員、マリ・クリスティーヌ委員、藪田委員、山本委員、渡邉妙子委員が所用のため欠席となっております。また、宮城委員から遅れる旨、御連絡をいただいております。

それでは、開会に当たりまして、知事から御挨拶を申し上げます。

川　勝　知　事：　皆様、どうも御多用のところ、お越しいただきましてありがとうございます。

この実践委員会は、検討委員会を含めますと４年目でしょうか。検討委員会が１年あって、実践委員会は丸３年やりました。

今日は、教育委員の元三菱商事、米久さんの偉い先生も来ておられまして、教育委員会も大きな存在感を持つようになりました。

そして、こちらで御提言賜りました様々な内容が実践に移されております。

そして、今年も昨年に引き続き、同じ方々に委員を委嘱しましたところ、快く受けていただきまして大変ありがたく感謝をしているところでございます。

例えば、１つはスポーツですね、あるいは演劇、音楽は、まだ言われていませんが、観光、こうしたものを学科の中に入れ込んではどうかという御提言をいただきまして、調査に入っております。

大学でも先に観光学科とか観光学コースを県立大学で来年から設置することになっておりまして、そういうことを勉強した子が上のほうに進めるような受け皿づくりもやってきているということです。

それから、こういうＩＣＴの時代ですから、そういうことに通じていないといけない、ＩＣＴ教育もちゃんとやれということで、無線ＬＡＮの整備を今やっております。

それから、国際バカロレア認定校を調査しまして、その調査結果を踏まえて、近日中に実践に移していくということになっております。

それから、大きくは知性を高める、これはホモ・サピエンスですから当然のことです。しかしながら、演劇にしろ、音楽にしろ、スポーツにしろ、あるいは農業や水産、あるいは将棋、あるいは大谷君、最近は幸太郎君も。昨日は４打数１安打だったのではなかったかな、それでも６番から５番になって、清宮幸太郎君のことです。大谷君は３割台です。

だから、ああいう者たちには、中学、高校ぐらいから、明らかにずば抜けた才能がありまして、野球、あるいは藤井聡太君のように将棋道、そうした道を通して人格になっていくということでございまして、それを広く技芸を磨くと言っております。

富士山に登る道は、たくさんございますように、人が立派になってい

く道は様々であると。それはいつぐらいまでか。十有五にして学に志せと孔子さんは言われました。志せるということですね。だから10代の前半ぐらいで、自分は魚釣りの名人になりたいとか、ラーメンの名人になりたいとか、そういうものを志す。中には大学者になりたいとか、いろいろな人がいらっしゃるでしょう。ただ大政治家になりたいというのは少ないのですね。政治家が堕落していますから。ですから、最近は小学生で立派な学者になるという人が出ていますので、何よりのことだと思っておりますが、そういうことで、いろいろ道があるということでございます。

それから、やはり人は自らのためだけでなく、人のため、社会のために生きているということですから、そう言えるような人になることが大切です。そのためにこの地域を挙げて、子供たち、少年・少女のために、何か一肌を脱ぐような機会を持たねばならないといった大まかな枠組みをこの実践委員会でいただいておりまして、そしていろいろな職種の方々に集まっていただいておりますので、教育委員会でも高く評価をしていただいております。

とりわけ委員長をお務めいただいております矢野弘典さん、これまで副委員長を務めていただいております池上先生には、どちらかが必ず総合教育会議に御出席くださって、こちらで皆様が言われたことを、簡潔明瞭に教育委員の皆様方にお伝えすることを通して、教育委員会の実践性も上がっていくと思っております。

今回のテーマには入っておりませんが、例えば高校の再編というのがあります。具体的には掛川の横須賀高校と御前崎にございます池新田高校、これが合併すると教育委員会でお決めになったわけです。

どうしてですかというと、だんだん高校生が少なくなる。ここにはどのぐらいのクラスが必要ですかと聞くと、１学年８クラス必要だというのです。

そうすると、私の高校は４クラスだったので、あれは高校ではなかったのかということで、私の高校生活は失敗だったかなと。そんなことはないですよ。中学校のときは18クラスですよ。多過ぎたかなと、いやそんなことないですよ。ですから、クラスの数というのは、本当に重要な基準になるのかどうか。

矢野委員長には､池新田高校に御視察に行っていただいたでしょうか。これからですか。明日行かれる。現場主義でやっていただく。

ですから、何が出てくるのかわからないので、出てきた問題は、それをアジェンダでないからといって沈めないで、必ず臨機応変にいろいろな議論をしていただいて、それを現場に生かしていきたいと。現場に問題がある場合は、その問題を解決するということでございます。

それから、今日初めて聞かされたのですが、このお花、ガーベラ、濃いオレンジが、日本で一番たくさん作っているのが静岡県です。バラ、1,000品種以上のものを作っております。スプレー花、黄色い小さな花

弁ですね。カーネーション、河津だけで380品種ぐらい作っております。トルコキキョウ、今日は浜松から持ってきましたが、これは島田でたくさん作っております。このお花の種類を置いてあるのは、私の机の上だけだったそうです。これは事務局が、花のある方には本当のお花を添えたいということで、静岡県に花を添えていただいている皆様方に対し、感謝の気持ちを込めて真ん中にいつも置いてあるそうでございます。事務局の方、どうもありがとうございます。気が付かなくて済みません。

では、そういうことで、これから１年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。

事　務　局：　ありがとうございました。

次に、矢野委員長から御挨拶をいただきます。よろしくお願いします。

矢野委員長：　皆様、こんにちは。

また１年間、皆様と御一緒に議論をし、提案を実らせていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。

去年の秋、浙江省に参りましたら、大きな禅寺がありまして、そこに大きな梵鐘がつるしてあったのです。お坊さんに聞いたら、日本の永平寺が贈ったそうです。すごく重くてびくともしないのですが、これを100回も200回も小さい力で押しておりますと、だんだん動き出すのです。

私は、そんなに時間がありませんでしたから、棒で叩いて音を出して、余韻を楽しんできたのですが、それを見まして、この委員会もよく似ていると感じました。

最初は、やることが小さくていいと思います。静岡県は、「富国有徳の国づくり」という大きな方針を持っています。なかんずく「『有徳の人』づくり」を目標にして、県を挙げて教育改革をしようとしています。

大きな方向や目的がはっきりしているわけですから、それを実現するにはどこから始めたらいいかが常に課題なのです。大きな方針は誰でも作れるのですが、どこから始めるかは、現場に精通している人からしかアイデアは出てこないと思います。私は、検討委員会も含めて丸４年間やってまいりまして、つくづくそのことを考えております。どうぞ皆様は、御専門のフィールドから、是非アイデアを出していただきたいと思います。

そのアイデアを知事が代表して総合教育会議に諮ります。私も池上先生と交替で出ておりますが、本当に体制はできていると思います。実践委員会の意見を尊重して、総合教育会議で全県の方針にしていただいております。

こうして今日も教育委員会の幹部の皆様が傍聴にお見えになっていますし、私たちは県民の声を代表する立場にあるわけですが、それを実行するのは教育委員会、あるいは総合教育局ですけれども、この二つがぴったりと一緒になって取り組んでいますから、必ず成果につながってく

ると、私は信じております。

この３年を振り返ってみましても、例えばスポーツの人材バンクをつくり、それから、清宮委員の御提案により、磐田で学校を超えてスポーツクラブをつくる、これも成果として実ってきております。

西部にできたから、今度は東部にもつくりたい、種目は何が良いかと考えて、例えば山本委員は、「サッカーがあるじゃないか。」とおっしゃってくれています。そうやって段々と広がっていくのです。

そのほかには、静岡式35人学級の下限を撤廃しました。今までは、１クラス25人という下限がありましたが、それをなくすことによって幾らでも、先程の知事の話にも関係しますが、少人数のクラスで勉強ができます。そういうちょっとしたところに気付けば、それが成果として実っていくのです。

この場で議論が出て、まだなかなか実現化していないこともありますが、それはめげずに、これからも案としてまとめていけばよろしいと思います。

また、すぐには実らないにしても、県立高校に演劇科をつくるなど、いろいろなアイデアが検討段階に入っていることは、すごいことです。

先ほど「『有徳の人』づくり」と申し上げましたが、今日皆様のお手元に配られておりますこの基本計画は、本当に議論を重ねてでき上がった素晴らしい内容のものだと思いますが、今までになかった、この横長の表を見てください。

「『有徳の人』づくりに向けた静岡県の教育施策」ということで、教育委員会は、小・中学校、高校を主体に見ておられますが、学校に上がる前の乳幼児期から始まって、大学、大学院を終えて社会に出て、その人たちがもう一度学習する。これが社会人の教育ですね。生涯学習という言葉がありまして、これは素晴らしい言葉だと思いますが、生涯学習を実現するためには、生涯教育の場がなければいけません。

それを静岡県でこうして一貫して、同じ思想のもとに計画を具体化しようということですから、生涯教育と生涯学習というのは、紙の表と裏のようなもので、そういう観点から全体を俯瞰しながら、いろいろな御提案をしていただければありがたいと思います。

委員会が始まったら、なるべく黙っておりますので、最初ぐらいはお許しいただけるかと思って少し長話をさせていただきました。どうぞ１年間、御協力をお願いいたします。

事　務　局：　ありがとうございました。

それでは、議事に入ります。

これからの議事進行は、矢野委員長にお願いいたします。よろしくお願いします。

矢野委員長：　それでは、皆様のお手元にあります議事次第に従って進行してまいり

ます。
　最初に副委員長の指名でございますが、地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会設置要綱第５条第３項に基づきまして、副委員長は委員長が指名することになっております。
　昨年度に引き続き、池上委員に副委員長をお願いしたいと思いますが、池上委員、よろしいでしょうか。

池　上　委　員：　はい、かしこまりました。

矢 野 委 員 長：　ありがとうございます。
　それでは、池上委員に副委員長をお願いすることといたします。本年度もどうぞよろしくお願いします。
　それでは、恐縮ですが副委員長席に御移動いただきたいと思います。

（池上副委員長が副委員長席に移動）

矢 野 委 員 長：　それでは、早速議事に入りますが、報告事項について事務局から説明をお願いします。

事　　務　　局：　それでは、事務局から説明いたします。
　資料の２ページ、資料２を御覧ください。
　平成30年度の検討事項及び年間スケジュールです。
　「１　検討事項」でございます。
　３月13日の第４回県総合教育会議におきまして、４項目の検討事項が決定いたしました。
　「知性を高める学習」の充実（確かな学力の向上）、「技芸を磨く実学」の奨励（スポーツ、文化芸術）、学びを支える地域に根差した学校づくりの推進、誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進、以上の４項目であります。
　したがいまして、この４項目について、総合教育会議に先立って実践委員会で御検討いただく予定でございます。
　次に、下の「２　年間スケジュール」について説明いたします。
　本年度、実践委員会は年４回の開催を予定しております。各回の議事内容は、こちらに記載してある内容を予定しておりますが、協議の進捗状況等により変更になることがございます。
　次に、先ほど矢野委員長から御紹介がございましたけれども、本日、卓上に平成30年度から４年間の本県教育の目標や、施策の基本方針を示しますふじのくに「有徳の人」づくり大綱と、施策の計画的な推進を図るために策定しました県教育振興基本計画をお配りしてございます。
　この大綱及び計画につきましては、皆様から頂戴しました御意見を踏まえまして、３月の総合教育会議で決定し、策定したものでございます。

策定に当たりましては、委員の皆様からも貴重な御意見を頂戴し、ありがとうございました。今後、県はこの大綱と計画に沿って「有徳の人」の育成に取り組んでまいりますので、引き続き御協力をいただければ幸いでございます。

以上で、事務局からの説明を終わります。

矢野委員長：　どうもありがとうございました。

ただいまの内容で進めてまいりますので、御承知おきください。

それでは、本日の意見交換のテーマは「知性を高める学習」の充実（確かな学力の向上）です。

それでは、事務局から配付資料の説明をお願いします。

事務局：　それでは、お手元の資料の３ページを御覧ください。

資料３でございます。本日の論点を記載してございます。

子供たちの資質・能力を伸長するためには、子供たちに基礎的・基本的な知識や技能に加えて、思考力・判断力・表現力等を身に付けさせるとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うことが必要です。

そこで、論点として事務局から２つを提案させていただきます。

１つ目の論点は、大学や地元自治体等との連携などによる学力向上、学習習慣定着、授業改善等の取組でございます。

高校段階では、高大接続改革等に対応し、子供たちの学習意欲を高め、社会で役立つ確かな学力を育成するために、大学や地元自治体等との連携など、具体的にどのような取組が考えられるか御意見をいただければと存じます。

また、小学校・中学校段階におきましては、子供たちが自ら学びたいという意欲を持ち、理解の質の向上や知識・学習習慣のさらなる定着を図るために、具体的にどのような取組が考えられるか御意見をいただければと存じます。

２つ目の論点は、学力向上に向けたＩＣＴの効果的な活用でございます。

子供たちの主体的・対話的で深い学びを実現するために、授業等において、どのようなＩＣＴを活用した取組が考えられるか御意見をいただければと存じます。

次に別冊資料を御覧ください。少し厚目のクリップ留めしたものでございます。

１ページをお開きください。

論点に関する基礎資料でございます。

まず、２でございますが、「授業の内容がよくわかる」と答える児童・生徒の割合は、平成28年度末に小学校では９割弱、中・高では７割強となっております。

また、３の「週に５日以上、家で勉強している」と答える児童・生徒

の割合は、平成28年度末に小学校では９割強、中学校では８割弱、高校では約５割となっております。
次に、２ページを御覧ください。
高校に関する資料でございます。
まず、４にございますとおり、本県の高校卒業者のうち半数以上が大学・短大へ進学しております。
この進学先を見ますと、５にございますとおり約３割が県内大学に、約７割が県外大学に進学しております。
次に、６を御覧ください。
主な大学の合格者数について記載しております。
週刊朝日の平成30年度入試データによりますと、本県の高校から東京大学への合格者は51人で全国11位、京都大学は59人で全国11位、早稲田大学は216人で全国９位など、各大学概ね10位前後の順位となっております。
次に、７を御覧ください。
平成30年度入試の大学入試センター試験の５教科総合の平均点は557点で、全国19位となっております。
次に、３ページを御覧ください。
小学校・中学校に関する資料でございます。
９にございますとおり、学校の授業時間以外に、普段１日当たり１時間以上勉強している児童・生徒の割合は、小６、中３ともに全国の平均を上回っております。
また、10にございますとおり、学校が休みの日に１日当たり１時間以上勉強している児童・生徒の割合は、小６は全国の平均を下回り、中３は全国の平均を上回っております。
次に、４ページを御覧ください。
ＩＣＴに関する資料でございます。
下の14にございますとおり、普通教室の無線ＬＡＮ整備率は、小学校、中学校で本県は全国１位となっております。
高校は15位でございますが、現在実施されております「学びを拡げるＩＣＴ活用事業」によりまして、平成30年度中に全県立学校で無線ＬＡＮを整備いたします。
次に15を見ますと、授業中にＩＣＴを活用して指導できる教員の割合は、年々高くなってきておりますが、小学校で41位、中学校では37位、高校は32位となっております。
次に、６ページを御覧ください。
２として、県の取組事例についてまとめてございます。
６ページから８ページまでは、高等学校の取組を、９ページ、10ページに、小・中学校の取組を、11ページにＩＣＴ活用に関する取組をまとめてございます。
次に、12ページを御覧ください。

県の取組事例のうち、魅力ある学校づくり推進事業について説明いたします。

２の事業実施背景等にございますとおり、2022年度から年次進行で実施されます新学習指導要領では、社会で自立的に活動していくために必要となる生徒の生きる力を育てるため、知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成を目指す改訂となっており、さらには、現在の高校１年生から対象となる大学入学共通テストでも、単に知識だけでなく、思考力・判断力・表現力、まさに知性が一層重視されるものとなっております。

この事業は、こうした状況を踏まえ、県立学校を対象とする本年度の新規事業でございまして、「３　平成30年度事業計画」の太字部分にございますとおり、知性を高める学習の充実のために４つのコアスクールを考えております。

コアスクールでは、主体的に学ぶ態度や思考力・判断力を養うため、探究的なスキルを持つ大学との連携や、社会問題に立ち向かう意欲や力を育成するために、地元自治体と協働した地域課題解決型教育の充実などの取組を行うこととしております。

各学校が、学校の実情や生徒の学習段階に応じて具体的な取組を提案し、その中からより効果があると思われる提案をコアスクールとして指定し、予算を配分する予定でございます。

この事業につきましては、本日、委員の皆様から具体的なアイデアなど、御意見をいただけたら、事業に反映したいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

次に、14ページを御覧ください。

外部機関との連携による探求的な学習について、県立高校における実践例をまとめてございます。

次に、15ページを御覧ください。

習熟度別学習集団の編成についてまとめてございます。

本県の多くの県立学校におきまして、生徒の習熟度に応じた効果的な指導を実施するために、２の実施例にございますとおり、例えば２クラスの生徒を習熟度別に３集団などに編成し授業を実施しております。

次に、16ページを御覧ください。

本県では、本年３月に今後10年間程度を見通したふじのくに魅力ある学校づくり推進計画を策定し、急激に変化する社会の中で、生徒の実態や地域の実情等を踏まえた魅力ある学校づくりを推進しております。

次に、17ページを御覧ください。

学びを拡げるＩＣＴ活用事業により、本県の県立学校へＩＣＴ機器の整備を進めております。

次に、19ページを御覧ください。

19ページから21ページにかけましては、ＩＣＴ機器の活用による授業改善事例をまとめてございます。

次に、22ページを御覧ください。

３といたしまして、公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアムの高大連携出張講座についてまとめてございます。

次に、23ページを御覧ください。

４といたしまして、高大接続改革についてまとめてございます。

下の図にございますとおり、高等学校教育、大学教育、その両者を接続する大学入学者選抜の一体的な改革が進んでいるところでございます。

次に、27ページを御覧ください。

５といたしまして、県教育振興基本計画における「知性を高める学習」の充実に関連する施策とその位置づけについてまとめてございます。

最後に、机上に配付資料としまして、カラー刷りの日経ビジネスのコピーをお配りしてございます。

これは、日経ビジネス本年３月19日号で、「大事なのは高校　人手不足に克つ新・人材発掘術」という特集が組まれ、豊富な人脈を持つ熱血営業マンが欲しいなら県立浜松北高校卒業生という記事が掲載されていましたので御紹介いたします。

以上で、事務局からの説明を終わります。

矢 野 委 員 長：　どうもありがとうございました。

事務局から論議の題材となる資料が用意されましたので、これを活用いただいて皆様から御意見を賜りたいと思います。

最初に、ただいまの説明資料について御質問があればお願いします。

片野さん、どうぞ。

片　野　委　員：　農業者としてではなく子育て世代として、この資料に対して要望があるのですが、静岡県で一括りにして、例えば１ページの２では、「授業の内容がよくわかると答える児童・生徒の割合」を、静岡県全体で表していますが、自分自身は静岡県東部に住んでいますので、県全体を一つにまとめた形で統計を出すのではなくて、３ブロックでもいいので、もう少し分けてもらいたいと思います。

というのも、20年前の自分の経験談なのですが、高校時代に教員の方に、静岡の学業は西高東低と気圧配置になぞらえて、浜松のほうが最終的にいい学校に行くというようなことを比喩された経験があります。それが本当かどうかは、まだいまだにわからないのですが。

ただ、今、子育て世代になってみて、20年前と同じようなことが続いていたのであれば、これは何とかして改善していかなければならないと思います。

この資料を見ますと、そういう部分が見えてこないので、できれば今後はもう少し細かくしていただけたらと思います。以上です。

矢 野 委 員 長：　ありがとうございます。

そういう統計資料は可能でしょうか。事務局からお願いします。

事　務　局：　教育政策課長の赤堀でございます。
この調査は、県下の学校を地域性等を考慮しながら抽出し、実施しているものでございます。
現在は、調査の結果を地域別にまとめておりませんが、今の委員の御意見も踏まえて、分析等に当たっては、地区別にも集計できるように検討していきたいと思います。

矢野委員長：　その資料ができたら一度御披露してください。よろしくお願いいたします。
ほかにはいかがでしょうか。
どうぞ杉さん。

杉　委　員：　参考資料の22ページを見ると、ふじのくに地域・大学コンソーシアムの高大連携出張講座がたくさん実施されていますが、この講座が実現するまでの過程を教えてください。

矢野委員長：　事務局で、どなたか概要がおわかりの方はいますか。

事　務　局：　大学課長の室伏でございます。
こちらの大学コンソーシアムの事業でございますが、コンソーシアムでマッチングをしております。まずは高校から派遣して欲しい授業の中身を聞き取りまして、それが実現できる大学をコンソーシアムのほうで探すという手続になっております。以上でございます。

矢野委員長：　よろしいですか。

杉　委　員：　そうすると、高校から上がってきたニーズを、全大学に投げ掛けるのでしょうか。

事　務　局：　何度か事業を実施して、どの大学であればできそうかが、わかりますので、その大学を中心に声を掛けております。全ての大学に投げ掛けているわけではないと聞いております。

杉　委　員：　ありがとうございます。

矢野委員長：　私は、この資料を見て少し疑問に思ったのですが、参考資料の１ページの３を見ると、小学生はよく勉強しているけれど、中学校、高校へ行くにつれて勉強しなくなっています。昔は小学校の頃は鞄を放り出して遊び回っていましたね。昔の話ですから今は通用しませんが、中学、高

校に行けば行くほど鉢巻きして勉強しました。それで昔は間に合ったのでしょうね。
　どうして進学するにつれて、どんどん低くなるのでしょうか。これは全国的にもこういう傾向なのでしょうか。

事　　務　　局：　高校教育課長の小野田と申します。
　全国的な状況はわかりませんが、３にありますとおり高校につきましては、約５割程度になっております。別のデータを見ましても、家で勉強をほとんどしないと答える生徒が３割程度いるというデータもございます。
　平日の夜、それから休日にどのように過ごしているのか見てみますと、多くの生徒が携帯電話、スマートフォンの利用で時間を費やしておりまして、私どもとしましても生徒が自ら学びたいと思うまで待つのではなくて、様々な仕掛けを施して、自発的な学習意欲を意図的に引き出すことが必要だと考えております。以上です。

矢 野 委 員 長：　勉強することに対して意欲を持たなくなったということは、別の見方をすれば、高校に入ると３割ぐらいの生徒はもう諦めてしまったということでしょうか。

事　　務　　局：　３割という数字を見ますと、そういう生徒も中にはいるのかなと感じております。以上です。

矢 野 委 員 長：　率が逆転するのがいいのかわかりませんが、学力の向上を今回のテーマの一つにしていますので、そういうところをきちっと追求しないと答えが出てこないのではないでしょうか。
　仲道さん、どうぞ。

仲　道　委　員：　このデータの取り方と目指すところとの齟齬を感じました。
　高大接続改革の学力の３要素に、「思考力・判断力・表現力」や、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」とありますが、これを学力として子供たちを育てていくときに、テストの点数というものでは、計り切れない部分があるのではないでしょうか。評価というものをどのように考えるのか、どう計画に盛り込んでいくのかが大切だと思います。
　今やスマホがあれば暗記して覚えるようなことは全部出てきますし、これからの職業もＡＩが取って替わって、今ある職業でなくなるものがたくさんあると言われています。そんな時代を生きていく子供たちの本当の学力を、どのように培っていくのか、データのとり方や考え方も御議論いただければと思います。

矢 野 委 員 長：　そうですね。

豊田さん、どうぞ。

豊　田　委　員：　私は、富岳館高校の評議員をやっておりますが、高校生の家庭学習では同じような数値が学校でも出ていました。そのときに委員の人から出た言葉が、勉強しているかどうかの勉強は、学校の宿題や予習に限られていて、高校に入ると部活にかなりの時間が掛かりますので、部活を一生懸命やって、将来的に活躍するような人は、部活以外にも違うチームに入っていて、勉強する時間だけで、努力はなかなか計れません。

自分の子供もそうでしたが、学校の勉強ではありませんが、将来自分がやっていきたいものの資格を取る学習時間は取っていました。それは勉強と言わないのかと、勉強を学校の宿題や予習に括ってしまうのはおかしいのではないかということで、スポーツをやっている人でもそのスポーツに関して何か調べていたり、それに向かって努力したりするのは家庭で学習するのと一緒ではないかと思います。「知性を高める」というところに最終的につながっていくのは、将来自分が何をしていったらいいのかというところで、学校の勉強イコール国語や英語というのは違うと思います。

そういうものを子供が自発的に見つけて、それを周りがサポートしていく体制が必要だと思います。

また、最近の小・中学生の保護者の話を聞いていると、自分の子供を自分の所有物のような感覚で、学校の先生にいろいろな話を持っていくパターンがすごく多いと自分の身の周りでも感じておりまして、まず子供たちの知性を高める前に、親としてのあり方について、教育というとおかしいかもしれませんが、自分が子育てしていたときよりも10位年下になってくると、随分考え方、やり方が違っていて、こんなふうに変わってしまうのかと感じましたので、同時に家庭、保護者、親の考え方もテーマとして取り上げて、双方で高めていくのがいいと思います。

矢 野 委 員 長：　そうですね。

仲道委員がおっしゃったのは、学力を何を基準に判定するかという、本当に基本的な問題ですね。共通テストがあってそれでどれだけ点数をとったかというのも基準でしょうし、進学率も一つの基準になるかもしれませんが、もっと違う意味の学力の判定基準があってもいいかもしれません。

それが何であるかは教育委員会の皆様も御研究だと思いますので、何かあればお話を聞きたいと思います。

それから、子供だけを対象にしても限度があるという豊田さんの御指摘はまさにそうですね。家庭、親の教育をどうするかですね。これも難しい問題ではありますが、それ抜きにして議論は進まないかもしれないですね。

皆様いかがでしょうか。

杉　　委　　員：　今のお二人のおっしゃるとおりですが、矢野委員長がおかしいとおっしゃるのもそのとおりだと思います。

先ほどの説明では、半分の人はゲームをやっているように聞こえましたが、そんなことはないと思います。「技芸を磨く」ということをここで議論しておりますが、スポーツを一生懸命やっていてもそれは学習、己の知性を高める訓練をしています。ファーブル昆虫記を書いたファーブルは昆虫ばかり追いかけて、毎日遊んでいたかというと、そうではなく、昆虫を研究していたのです。

ですから、データを取るときに、世の中で言う狭い意味での学習のデータも時系列で取って来ていますから、それは続けるとともに、もう少し幅広に「あなたは知性を磨くために何を努力していますか」と聞いてみると、数字は変わってくると思います。ゲームが良いかどうかはわかりませんが、あれもコンピューター能力を高めるかもしれないですね。

幅を広げたデータをもう一つ取ると良いと思います。

矢 野 委 員 長：　最高に優秀な頭脳が集まっているわけですから、事務局の皆様にも知恵を絞っていただいて、今の御指摘を具体化するように御検討を願いたいと思います。

清宮委員、何かありますか。

清　宮　委　員:　僕は今お話を聞いていて､時間をどう使うかということを感じました。

企業でいう残業が、僕は学生でいう宿題だと思っています。仕事ができる企業人は、会社にいる間に全て終わって、アフターファイブにプライベートの時間を過ごすということでいうと、学校教育で足りないものを家で補うということを、今はどこの県でもやっていると思いますが、それを静岡県はなくすぐらいな宣言をしてはどうかと思います。

それをなくすためにどうするのかというと、学校に一日６時間いるわけですから、週５日なり６日でいくと30時間になります。その多い時間をいかに使っていくのかというところを徹底的に考えるべきだと思います。。

資料を拝見すると習熟度別学習集団は、すごく面白い良いアイデアだと思いますし、それが今どういう進捗状況なのかも後で教えていただきたいと思います。

自分も子育てをした経験上、これは私立の事例ですが、私の場合、学校には任せられないところがあり余るほど見えてしまって、親が足りないところをサポートしていました。

それがわかっているならば、こういう会を持っている静岡県はそこにチャレンジするという宣言をしても面白いと思います。

ちなみに僕の息子の１週間のスケジュールは、鬼のようでした。勉強もしなくてはいけないですし、野球のためにも「そんなことやっていた

の」というような時間の使い方をして、大人になっていきました。

矢 野 委 員 長： ありがとうございました。

今の指摘は、これは絶対忘れてはいけないことですね。つまり学校教育が不足しているからみんな塾に行くのです。学校教育が充実していたら塾に行く必要はないということですよね。右の端と左の端を比較すると、そういう表現になろうかと思うのですが、そういう点で学校教育のあり方を反省することは必要なのではないでしょうか。

これは、すぐに答えが出る話ではないかもしれませんが、念頭に置いて、どうしたらいいか何か答えを出したいですね。どうもありがとうございました。

渡部さん、どうぞ。

渡 部 委 員： ２点ございます。

１つ目が今のディスカッションで、家で勉強している時間以外のものに、もうちょっと誇りを持てるというか、肯定されるようにならないと、このアンケートを書くときに罪悪感があって、少し数字を盛ってみたりとか、まさに小学校、中学校の夏休みの朝の６時から夜の９時まで５教科を色分けて塗り潰していく欄があって、５教科の５色しか塗ることがないのに、それ以外のことをしていると何もやっていないように見えてしまって、みんな少しずつ数字を盛っていくことになります。それを10年前位にクラスでみんなやっていたので、そこから出たアンケートだとしたら、プライドがある小学生は数字が高くなったり、高校生になるとそんな紙切れはどうでもよくなっているから、もしかしたら数字を盛っていないのかもしれないなと思いました。

ですから、その５教科の色が付かなくても、別に褒められなくてもいいけれど、自分のやっている時間の使い方があってもいいと肯定されるようになるとこのアンケートの意味が、もう少し見えるようになるのかなと思いました。それが１点です。

２つ目は、委員長がおっしゃった塾のことで、このアンケートの中に学校以外の学習塾などにどのぐらいの割合の生徒が行っているのかが探してもなかったので、もしそれがあったら教えていただきたいと思います。

私は、塾に小・中・高行ったことがなかったのですが、小・中・高と上がっていくに従って、やはり学習塾に行く、予備校に行く割合がクラスの中で増えていくので、特に中学生のときは、「塾でやるからもう話を聞いても意味がない」という発言と、「塾でもうやったから話を聞く意味がない」ということで、塾で先に予習をやっていると、授業のモチベーションは下がります。また、塾で後から復習も兼ねてセンター試験で出るところだけをやってくれると、授業のモチベーションは下がりますね。

でも、今考えるとそれは知識の植え付けや、暗記科目だとモチベーションは上げようがないと思います。２回同じことを繰り返すのは、大人でも苦痛ですのでどんどん塾に行ける子、行っている子というよりは行ける機会があった生徒とそうでない生徒の、授業にどう参加していくかというモチベーションは変わっていくのかなと思いました。

それが数値として見えてくると、数字だけ伝えても年号の暗記をしても意味がないのであれば、塾に行って既に年号を暗記した子も参加できる歴史上の人物に関するディスカッションをしたりだとか、覚えたことをどう使うかということで教え合うグループワークができたり、もしかしたら先生の授業に工夫が見えるのかなと思います。

私は、国語の先生がその工夫をすごくしてくださる先生だったので、塾に行っていてほかの授業は寝ている子たちが国語の授業は起きていて、そのディスカッションに参加していたという記憶を思い出して、その関連性と、子供だけではなくて先生が工夫できることが見えてくるなら、そのデータに意味があると思った次第です。以上です。

矢 野 委 員 長： ありがとうございました。

加藤さん、どうぞ。

加　藤　委　員： 国際化という英語教育のお話もいっぱい出ていますので、その点について触れたいと思います。

例えば２ページを見ると、10年前位だったらこれでいいのかもしれないですが、調査している内容は、東大、京大に何人入ったとか、大学センター入試がどうだったのかで止まっています。

私が、リーダー塾という高校生のサマースクールをやったり、ＡＦＳという高校生の留学団体の代表をしたりしていて思うのは、もはや東大、京大に行かずに外国の北京大学とかスタンフォードとかハーバードを目指しています。

その裏付けとして、世界の大学ランキングを見ても、日本の大学はとても低くなっています。それは大学自身が考えて、国際化のために頑張らなくてはいけないと思いますので、ここの議論とは違うのかもしれませんが、ボーダーレスな時代に世界で闘っていこうと思うと、そこで他流試合をしなくてはいけない時代に入っていると思います。

ですから、静岡県から、例えば高校生のうちに留学したのか、留学生を受け入れたのか、それから日本の大学ではなくて海外の大学に行ったのかなど、そういう調査もできる限りしていただくといいと思います。

また、ＩＣＴで今後取り組む課題の中に、ＩＣＴを活用して大学と連携するというのがありましたが、それに加えて海外、例えばアジアの高校のあるクラスとSkypeでつないで、それで授業を一緒にするのはいかがでしょうか。今、Skypeは幾つでも一緒に連携できるのです。だから同じ授業で、例えば静岡と浙江省の高校とマレーシアのクアラルンプー

ルの学校とインドの学校と、それからフィンランドのどこかの学校と一緒になって共通言語を英語にして、一つのテーマについて、みんなでディスカッションをやろうと思ったらできるのです。

今度、ＡＦＳの中国協会が提案して、中国のクラスと100校をつないで何かやろうという計画が持ち上がっていて、今、日本のパートナーを探しています。

そういうことも含めると、日本から留学するのはいいのですが、行けるのは１人だけです。けれども、クラス単位でやると、みんなが国際化の一翼を担えるというメリットがあります。

ＩＣＴの活用という意味で、日本の大学との連携もいいのですが、海外の高校や大学と連携して、Skypeであれば無料で、今や携帯電話で通話するのも、ＬＩＮＥやWhatsApなどいろいろなものを使って、無料でどことでも連絡が取れる時代になっています。

そういうことを通して相手の国を見ると、例えば私は東南アジアや中国､韓国と今つながりを深めていますけれども､全然レベルが違います。向こうの高校生のほうが、思考力や判断力、それからディスカッション能力などは上です。でも、それは身近なところから改善できると思います。

日本の大学の入試改革も、思考力を考えるという意味で、４択の問題から書かせる問題をやらせたら、全然だめだという話がこの前新聞に出ていましたが、やはり思考力などを問うのであれば、そういうことも大事だと思います。

もう一つ言わせていただくと､「日本の教育はだめだ」とよく言われますが、暗記が悪いのかというと違うと思います。やはり最低限の一般教養は必要なのです。私はもうすぐ60歳になりますが、イイクニと覚えて1192年など、いまだに頭にインプットされています。暗記教育のバランスが大事なのです。

矢野先生は論語の大家でいらっしゃいますが、論語の一つを教養として知らなければ、さっき川勝知事がおっしゃっていた今の政治家みたいになってしまうと思いますので、そのバランスをどうしていくのかがと課題だと思います。

矢 野 委 員 長：　ＩＣＴの役割について、大変具体的なお話をいただきありがとうございました。

確かに何周遅れかわかりませんが、日本はその程度のポジションで走っているのだと思います。ですから、この資料の中にもありましたが、ＩＣＴに相当予算をかけて、無線ＬＡＮを配置するなど一生懸命努力しているのはよくわかりますが、どれほどスピードアップしても恐らく追いつけない、でもやるしか道がないという状況ですね。

海外の高校生との授業が､Skypeでできるという御意見は画期的ですね。世界的にいったらそうでもないのでしょうか。日本人が聞いたらみんな

びっくりするお話だと思います。大変いい御意見をありがとうございました。

先ほどもどなたかのお話の中にありましたが、参考資料の12ページにコアスクールといって、学校単位にレベルを決めて予算付けをすると書いてあります。それから、15ページには、同じ学校の中でクラス分けをして、学力向上を図っているという事例のお話がありましたが、この辺について御意見はありませんでしょうか。

池上副委員長：　池上でございます。

今日はいきなりかなり大きい議論が進んでいたものですから、私が大学にいる立場として少し具体的な話をするタイミングを逸してしまっていました。

これからお話しするのは、どちらかというと具体的な話になります。高大連携や大学や地元自治体と連携した改善の取組ということで、私自身も少し関わったことがある取組でお話ししたいと思います。

それは、自治体等でつくっている様々なプラン、例えば多文化共生の推進プランであるとか、男女共同参画の推進プランであるとか、そういう中学生、高校生が比較的イメージしやすいプランをつくる途中の段階において、継続的なワークショップを中学生や高校生と行う取組についてです。

一昨年度、磐田市の多文化共生推進プランをつくるときに私のゼミ生が行って、またそこの中学校の担当の先生が私のゼミのＯＧだったこともあって、非常に有意義なディスカッションの機会を持つことができました。

その経験を昨年度、愛知県が多文化共生プランをつくるときに、こんなことをやってみたらどうかと提案したところ、私立の高校ですが、やはり国際科のある高校に愛知県の職員が出掛けていって、継続的な議論をして、最初はなかなか問題の焦点が噛み合わなかったそうですが、最終的には大変意義のある、そして若者らしい自分の将来のことだという当事者性を持った提案が多々出てきたと聞いています。

一方的に大学の教員が行って、講義をするのも刺激になりますが、一緒に何か同じ方向を向いて考える、アクティブ・ラーニングということもここに書いてありますが、真似っこのアクティブ・ラーニングではなくて、それが本当に実際のまちや、あるいは県の向こう何年かを方向付けるプランに生かされる可能性があるという、言わば真剣勝負のアクティブ・ラーニングをやることで、子供たちも当事者性を持って学んだと聞いています。

そうすると、その分野の専門の大学の教員、それから当該プラン等をつくっている自治体、そして学校と、この３者の連携で学びが豊かになると思います。それは、具体的な知識を教えるものではないと思いますが、モチベーションをすごく刺激します。例えば60分で何か知識を詰め

込むのと比べて、その60分で刺激されたモチベーションで、自分で調べていくドライブがかかっていくと思い御紹介いたしました。

前に言ったかもしれませんが、ニュース・イン・エデュケーション、ニュースで新聞記事を使う教育実践、ＮＩＥと言いますけれども、私はこれをパブリックコメント・イン・エデュケーション、ＰＩＥと自分の造語ですが使っています。必ずしもパブリックコメントの時期だけに限定しなくてもいいと思いますが、中学生や高校生が当事者性を持って考えられる、そして自分たちの未来の問題だと考えられる、そういうテーマで考えてみるのも一つの方法だと思って、御提案いたします。

矢野委員長：　ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

豊田委員、どうぞ。

豊田委員：　農家民宿をやっていて、海外のお客様を迎えることが多いです。たまたま台湾の観光雑誌で紹介されておりますので、台湾のお客様が大変多いのですが、幼稚園のお子様でも英語がぺらぺらです。

私は、自分ができないものですから、いつも苦労するのですが、自分の子供も全然話せないし交流もできないので、高校でグローバル人材教育をするのではなくて、もっと小さいときから、それが幼児のときがいいのかどうかはまた置いておいて、文法を習うとかではなくて英会話、英語でコミュニケーションができるぐらいのレベルにまず持っていかないと、グローバル人材を育てるのは、非常に難しいと毎回思います。子供にばかにされながらいつも接客していて、本当に恥ずかしいのですが、そこはもう少し小さい頃から入れていっていただきたいと思います。

矢野委員長：　ありがとうございました。

塙先生、いかがでしょうか。

塙委員：　まずグローバル化の話ですが、これは結構面白いのです。私のところでは、コースを設定することでグローバル化を推進しました。学年に１クラスですが、それが結果的には全学年に影響を与えるところまで行っております。

そのグローバル化は、留学生を受け入れる形でやっております。それから海外の学校、大学、高校、その他の世代、地域コミュニティーの方々との交流事業を、年間を通してかなりの回数をやっています。

一番良かったなと思うのは、グローバル化が逆に自己を見直すいいきっかけになっているということです。例えばフィンランドから15歳の女の子が１人、留学してまいりました。独学で日本語もぺらぺらです。そして、さらに日本の文化や歴史について、かなり勉強してきているのです。そんな生徒が教室に１人入ったのです。周りの生徒は一体何だとな

って、結局自分自身だと。留学生は結構、フランス人でもドイツ人でも、地域愛が強い連中が多いですね。その中で子供たちは、地元のことを考えていくようになっています。日本の文化や歴史、それから地域について考えることで、それが引き金になって、現在、地域を巻き込んで地域課題解決プログラムというのをやっています。

それから、いろいろ御意見が出る中で、塾・予備校へ通うというお話がありましたが、私のところでは、塾・予備校へ通う生徒さんは大体３％ぐらいです。通えないのです。

画一化された授業をやらざるを得ないのですが、どうしてもこぼれていきます。それを拾い上げて、さらに部活動で抜けて、補充が必要であればマンツーマンで指導しています。今現在、教科がそろって指導できる時間は夜７時半までですが、その後は自学自習の形で９時まで残って学校で勉強をやれるようにしてあります。一時期はかなり遅い時間までやっておりまして、深夜23時過ぎまでやっていたことがありました。そのせいで塾・予備校から大分嫌われました。

習熟度というのもいい言葉ですが、昭和30年代半ばに、桐蔭学園の鵜川先生が始めたのです。差別教育ということで、大分たたかれましたが、やはり習熟度も有効だと思います。

文武芸のバランスがとれているのが一番いいのではないかということで、私のところでは、例えば吹奏楽部の定期演奏会があると、運動部の連中も全部参加させます。いろいろな形で参加させることで、大分バランスが取れると思います。

ただ高校２年、３年については、多少は比重を変えた指導体制に変えますし、子供たちも部活を６割のエネルギー配分でやるとか、そういう方法で進むようになっています。やはりバランスが極端に崩れてしまうのは、非常に怖いです。

ＩＣＴの話もありましたが、アメリカのキャシー・デビットソンですか、オックスフォード大学の将来予測というのが出ていましたが、ある程度バランスをとって教育してやることで、子供たちの20年後、30年後に教育現場が責任を持たなければいけないと考えております。

学習時間という話もありましたが、中には、高校へ上がってから先生方を見切ってしまう学生が出てきます。そんな中で学習時間が減っているのかもしれません。

ただ、子供たちの能力は無限大なのです。先生方は、自分たちの狭隘な体験・経験値の中でしか物を言わない場合が非常に多いです。ですから、子供たちを信じてやらないと、子供たちは成長できません。何かと言えばすぐ成果目標を掲げるのです。卒業のあたりで振り返ってみたら、はるか目標に及ばず、先生方は一気に窮するという傾向が強いです。努力目標や行動目標などの細かい目標を掲げて、必ずそれに届かせてやることが必要です。

訓練によって人間の思考は鍛えられます。今、子供たちもスマホに向

かう時間が大分長いと言っていますが、論理的思考を鍛えるには、文章を書かないとだめです。書くということも、今、校内でやらせています。それこそ国語の先生でも誤字脱字、何だこの文はということもよくあります。やはり時代の流れの中で、弊害もあるのかなと思います。

教育現場もかなり雑用が多くなって、人と人が向き合う時間が、どうしても少なくなっています。保護者が不安だという話もありますが、昔は私の地域も、公立も私学も地区会をやっていまして、大体６月、７月ぐらいに、エリアごとに保護者の方を集めて、先生方とコミュニケーションの場を設定するのです。今はほとんど行われていませんが、私のところは今も続けています。そういう対話の場をもっと多くしていかないと、非常に具合が悪いです。

今、グローバル化の中で、個と個が直接つながればいいですが、スマホを見ながら自分の世界をつくり、バーチャルの世界で少なくとも自己表現はできますから、そんな状況の中で、自分のつくった物差しを持って現実世界へ戻ってくれば、それこそどんなことになるか、その制約もつけていかないとまずいと思います。最近の中高生は、家庭内でかなりの時間、スマホをいじっているようです。その辺も、ＩＣＴ導入との関係の中で調整しなければならない大きな課題だと思います。

矢 野 委 員 長： ありがとうございました。
仲道さん、どうぞ。

仲　道　委　員： 私の理解ですが、「知性を高める学習」を、人間力を高める、あるいは教養を豊かにするにはどうするかということと同義と捉えています。そこで問題になるのが、教養とは何なのかということだと思います。

今のお話にもあった、ほかの国の生徒さんが文化や歴史を調べて日本にやってきたというような、そういった人間力やバランス力をどう育んでいくか。

先日、撮影の現場がありまして、私がピアノを弾くところに４歳から８歳の子役のお子さん10人ぐらいがやってきて、一緒に撮影したのです。休憩時間になり、ちょっとピアノを弾いたのですが、「小犬のワルツ」を弾いたらみんな喜ぶかなと思って弾いたら、その10人中、誰も知らない。聞いたことがないと言ったのです。それでは、これは知っているかなと思って、「トルコ行進曲」を弾いても、知らないと言う。それで「エリーゼのために」を弾いたら、やっと２人知っていました。

「小犬のワルツ」は子供みんなが知っているものという思い込みがあったので驚いたのでしたが、音楽をしている身だからみんなに音楽を好きになって欲しいと思うだけではなくて、これから世界に出ていったときに、このまま「小犬のワルツ」を聞いたことがなくショパンの何たるかを話せないということになったら、世界のいわゆるエリートや教養のある人たちと、対等に会話ができないのではとも、思いました。ビジネ

スマンも教養とともにあるから尊敬されるわけで、文化に対する造詣の深さが、信頼関係にまで結びつきます。もしも今、家庭で文化的素養を培うことが難しかったり、親御様のなかでもその熱意が薄くなったりしているならば、学校や公共の教育機関でどう考えるのかということが、非常に大事だと思います。

音楽に限らず、芸術教育は、学校教育の中で言われてきた資質・能力の育成に対して非常に有効な手段だと思いますので、音楽や演劇をどのように学校教育に入れていくのか、特に小学校での活用について議論していただきたいと思います。

これまでの様々なリサーチから、例えば東大に入る生徒さんの多くは、子供の頃に音楽を習っていたというデータ等もありますが、是非とも教養として、そして人間力を高めるためにも、音楽をどのように学校教育に入れていくのかをしっかり考えていただきたいと思います。

矢 野 委 員 長： ありがとうございました。

私も海外ビジネスを長くやってきましたが、外国に行ってトップ同士で話をするときに、商売の話は昼間して、夜はそんな話はしないのです。演劇や音楽や絵、それぞれの国の歴史や文化、そういう話にみんな夢中になるわけです。そして、あの人はなかなか信頼できる素晴らしい人だとなりますと、昼間の仕事もうまくいくのです。本当に、そういう意味で教養の足りなさを感じることが多かったです。ですから、今おっしゃったお話は実に身に沁みます。ありがとうございました。

加藤さん、どうぞ。

加 藤 委 員： 私も去年、今のお話と全く同じことがありました。

「月の砂漠」や「荒城の月」などの日本の歌がありますね。毎年リーダー塾でマレーシアのマハティール元首相を呼んでいるのですが、マハティール御夫妻がバイオリンを弾かれるので、一緒に歌と合奏したいと言われて、月の砂漠と言われたのです。当然私は知っていますが、スタッフを含めて高校生たち、40歳位から下は、月の砂漠や荒城の月という歌自体をほとんど誰も知らなかったのです。

海外の音楽のみならず、日本のそういう美しいメロディーも知らない状況になっているのに、私も愕然としました。

歴史についてもそうで、高校になったら、日本史か世界史かは選択になります。まず自分の国の歴史を知らないというは、本当にゆゆしきことだと思います。

ここに歴史の大家がいらっしゃいますが、今年からＡＦＳで、アジア高校生架け橋プロジェクトという国の事業を引き受けることになって、20カ国から200人の高校生を１年間の留学ということで、日本に招聘するのですけれども、何と、例えばラオスは２人の枠なのですが、応募した日に100人来たというぐらいに、日本に対する人気があります。

そして、応募用紙を見ると、日本の歴史に興味があると書いてあるのです。それにもかかわらず、日本の子供たちが知らないというのは、本当にまずいと思います。

これをいかにしてやっていくかは、これから大事なことだと思いますので、これは去年、一昨年とずっと議論してきましたが、そこをさらに深めて、静岡として具体的に、特に歴史教育について、どういう取組をしていくかです。歴史教育をやるというと、右だとか左だとか、そういう話ばかりになっているので、そういうことではなくて、きちんとした歴史教育をしていくのが大事だと思います。

矢野委員長：　ありがとうございました。

先ほど塙先生が指摘されたことに戻りますと、ＩＣＴ教育の重要性は皆様同じように認識していらっしゃいますが、また反面、人と人との人間関係も大事にする必要があるという御指摘は、本当にそのとおりだと思います。

よく聞いてみると、スマホを使ってコミュニケーションを取っていますが、直接話をしているわけではなく、相手はずっと遠くにいるのです。でも、近頃の人たちは人間関係づくりが下手だとよく言われるので、それが、本当はダメージが大きいのではないかという気がいたしますが、その面で、どうやって調和をとっていくかが大きな課題ではないでしょうか。

ＩＣＴに関連して、もし皆様から御意見があればいただきたいと思います。

池上副委員長：　ＩＣＴに関して、非常に興味深いのは、静岡県ではＩＣＴの導入が、ハードウエア、機械の上では全国で上位だけれども、それを使いこなす教員が極めて少ないという数字が出ていました。

機械をどう使うのかは先生方次第ですけれども、人を育てるのが必要なのだろうなと思います。

19ページからのＩＣＴの活用事例を見ていくと、具体的な事例が写真付きで書いてありますが、この中には、例えば先ほど加藤さんがおっしゃった世界の仲間たちとつながるという発想は全く入っていません。なぜかと言うと、先生方がやっていないからなのですね。大変残念に思います。

一方で、ここから先はすごくポジショントークになるのは百も承知で言いますが、静岡県の小中高で、これだけ無線ＬＡＮが入っていながら、大変お恥ずかしいことに、公の場であえて言いますけれども、少なくとも静岡文化芸術大学の無線ＬＡＮ状況は極めて貧弱です。教室では、昨年度導入してわずか数教室です。これだけ小・中学校、あるいは高校で無線ＬＡＮを使って、タブレットを使って、さあ県内の大学に行きましょうと言って、文芸大に来ました、教室に無線ＬＡＮ環境がない。

今年度、私たちはラーニング・マネージメント・システム、ＬＭＳ（学習管理システム）のある機種を導入したのですが、それを全教室で学生たちが無線ＬＡＮを使ってリアルに使うという状況が残念ながらできていません。何かすごくバランスを欠いた導入だと思います。それでいて、県外の大学に行かないで地元の大学にと言っている。もう少し総合的な視点で、子供たちの学びを支えるインフラストラクチャーを考えていく必要があるのではないかと感じています。

とてもお恥ずかしい事実をここで公表しました。

矢野委員長：　ありがとうございました。

杉さん、どうぞ。

杉　委　員：　ＩＣＴはあくまで道具なのです。ＩＣＴをどう使うか、使える先生がいるのかという話がありました。先生には頑張ってもらいたいのですが、先生方は忙しいので、先生の技量を上げるのには時間が掛かります。

一方で、学校ＩＣＴ支援資格を持った方たちがいらっしゃいます。この方は先生ではありませんが、ＩＣＴを使って先生たちが思うことを実現させる力を持っています。こういう方を養成するような支援をしてはどうでしょうか。

それから、そういう方が学校に来てくださることになったら、そのときの人件費を支援してあげてはどうでしょうか。学校の先生が、教え方は上手なのに、ＩＣＴをどう活用したらいいかがわからないときに、ＩＣＴの専門家とうまく連携ができれば良いものができると思います。

先ほど池上先生がおっしゃった、設備は整っていても使えないという状況が改善されてくると思いますので、学校ＩＣＴ支援員資格というところに目を向けていただけるとありがたいと思います。

矢野委員長：　それは県を挙げた取組になると思いますが、私が見学させていただいたある高校では、非常に進んでおりまして、「ほかの学校から転任してこられる先生で、必ずしも得意でない人がいる場合は、どうするのですか」と聞いたら、学校の中にＩＣＴの推進委員会があって、そこで責任を持ってきちんと先生を教育するのだと言っていました。

子供たちは感度が高いので、すぐに覚えてしまって、心配ないそうです。むしろ先生のほうが、教材をつくるにしても、それをプレゼンテーションするにしても、そういう能力や知識、経験が必要ですけれども、そういう教育を学校がやっているという例を見学してまいりました。そういうことも大事だと思います。

加　藤　委　員：　ＩＣＴは道具だとおっしゃっていましたけれども、英語もコミュニケーションの道具ですよね。ですから、人間力とＩＣＴは反比例をしていないといつも思っています。ただ、いつ使ってどういうふうにするのか

が問題なのではないでしょうか。

例えば、２週間のリーダー塾では、最初の日に携帯電話を皆様から取り上げて２週間一切お返ししないのですが、そして180人の高校生のコミュニケーション能力を高めることを徹底しています。

夜の部で、アジア・ハイスクール・サミットというのをやって、みんなで課題に取り組むときには、パソコンを渡して、いろいろなことをそれで調べます。

ただし、ＩＣＴというのは、実は情報飢餓時代ではないかと思っています。情報が溢れているようで、何かを検索すると最初に出てくる10項目位でみんなもう満足してしまうのです。特にウィキペディアみたいなものを読むと、「ああ、そうかそうか」となってしまう。そこが一番危険だと思っています。ですから、調べるときにそれをどう教えてあげるのかを、先生なり、専門家の方々がしっかり教えてあげて、しかも英語を使ってパソコンを使うと、世界とも通じるのだということを知ると、すごく広がっていくと思います。

私は静岡県には、すごいメリットがあると思っているのですが、それはやはり富士山があるということです。だから、世界とつながろうと思ったら、富士山のある静岡と言えば、世界の人たちは、一緒につながりたいなと思うのです。

それから、教員の養成やＩＣＴを具体的にどう使うのかという話がありましたが、大学生や起業家の方、静岡県出身の若い世代でＩＴをやっているような方がいると思いますので、そういう方たちを活用したらいいと思います。

矢 野 委 員 長： 宮城さん、いかがでしょうか。

大体雰囲気を把握されたと思いますので。知性を高める教育をどうやって充実したらいいかをテーマに話を進めておりますが。

宮 城 委 員： いろいろ思うところがありますが、少し質問があります。

加藤さんが、先ほどおっしゃっていた、ほかの国の若い子たちに比べて、すごく日本人の子供たちが劣っているというのは、具体的にはどういったことなのでしょうか。

加 藤 委 員： 劣っているという言い方は、済みません、失言だったかもしれません。みんなと議論することに慣れていない、ナイーブと言ったほうがいいかもしれません。

大人の私もそうですが、私みたいな厚かましい人間でも、中国の人やインドの人にわあっと言われると、国際会議で黙ってしまう自分がいます。そういう意味でのコミュニケーション能力と言ったほうがいいかもしれせん。

例えばスタンフォードにしてもハーバードにしても、そういう大学の

授業というのは、もちろん論文を書くこととともに、何かについて発表するとか、自分の言葉で語ることができないと、なかなか認められないので、そういう表現能力の教育をこれから充実したほうがいいと思います。むしろ宮城さんの世界だと思いますが。

宮　城　委　員：　わかりました。

まず、僕は最近、どちらかというとコンサバティブな思考になっています。どういう意味かといいますと、例えば、今おっしゃったような、みんながわあっと言っている中でなかなか発言できないというのは、これは別に、昨日、今日始まったことではないです。例えば30年前だって、日本人はみんなそうでした。しかし、ジャパン・アズ・ナンバーワンと言われた時代があったわけです。

何が今本当に問題なのか。それは例えば、みんながそれぞれ自分の主張を力強く押し出していく中で、日本人は、なるべく相手に合わせようとします。こんなにこの人言っているのだから、なるべく合わせてと。

でも、これは弱みというわけではありません。僕自身、世界のことをよく知らないうちは、主張ができない日本人は損だと思っていました。世界的な会議でも有名な人は、日本人に余りいないし、日本人は損だと思っていましたが、現実に外国の人と仕事をするようになってみたら、日本人は一緒に仕事がしやすい。一緒に仕事がしやすいという意味では断トツに好まれています。日本人と組みたいという、すごい蓄積を日本人はつくってきたのだ、僕の先輩のおかげで、今僕はこれだけ仕事がしやすくなっていると思いました。

そういう意味で、今、弱点だと言われていることは、別に昨日、今日始まったわけではなくて、それをむしろ強みとしてやってきた時代があるのです。じゃあ何で今そんなにだめだ、だめだと言われるようになっているのか。本当の原因、何がだめになっているのかを精査する必要があると思います。

例えば、英語が苦手であっても、別にこれは昨日、今日始まったことではなくて、明治時代の日本人だって、苦手中の苦手です。ところが、それでも明治末の日本人も偉大な業績を残しています。単純に言えば、何で日本は近代化が成し遂げられたのかというと、別に外国語が得意だったからではないです。

少し脇にそれますが、バイリンガルで暮らさざるを得ない国はたくさんあります。例えば、ベルギーやスイスです。そもそも子供の頃からバイリンガルで暮らさなくてはいけない国から、偉大な知性がほかの国よりも出ているかというと、そうでもないです。英語しかしゃべれない国の人たちとバイリンガルのスイス人とかベルギー人とを比べても、別に差はない。優れた人は優れているというだけです。

だから、日本語しかしゃべれなくても、本当に必要になれば英語を学ぶ。ないしは、これからそれこそＩＣＴで自動翻訳も、今よりかなりま

しになっている。頭の中で英語で考えろと言いますが、もしかすると、思考力そのもの、思考力を鍛えるのは、一つの言語でしかできないかもしれません。これは絶対ではありませんが、そうかもしれない。そうすると、思考力がないのに、ツールとしての語学を獲得してどうなるのだということになります。

つまり、本当に今の日本の教育が劣っている部分、何かまずい部分はどこなのかを精査しないといけないと思います。

僕は、かつての日本人は、十分世界と渡り合っていたと思います。例えば、スティーブ・ジョブズやビル・ゲイツみたいな人から始まって、今でいえばマーク・ザッカバールとか、ジェフ・ベゾスみたいに10年や20年で世界の富豪の５位以内に入ってしまうような人は、大体ＩＣＴというか、ＩＴ系です。

そういう人たちを見ていると、みんな焦ります。何か日本は物すごく遅れてしまったなと、焦ってしまう。先生たちも、自分に自信が持てなくなってしまう。自分に自信が持てない先生たちに教わっても、生徒たちはその教わったことは、なかなか身にならないのではないでしょうか。

日本人が、何かみんなお尻に火がついたようになっていて、これではだめだぞとばかり思うようになってしまった。

本当は、そのだめな部分は少しだけで、日本が地下資源もないのにこれだけ成功したのは、ほとんど教育のおかげではないかと、アジアの国々の多くの人たちが言っていました。なぜ日本はアジアの中でうまくいったのか、それは教育が良かったのだろうと言っていました。その良かったと言われている教育の全部がだめ、無効になっているとは思えない。

そうすると、例えばザッカバーグやジェフ・ベゾスを見れば、アメリカ人だって大半は落ちこぼれです。だから、それと比べて日本人が慌てて自信を失っても、それはしようがないと思います。

ともかく今まで蓄積してきたことに、ある程度自信を持つべきだと思います。そして日本語で鍛えた思考力にも自信を持つべきだと。すぐに英語にできないからといって恥じ入ることはないと思います。

矢 野 委 員 長： ありがとうございました。

先ほどどなたかから、日本の大学世界ランキングの地位が低いというお話がありましたが、有馬朗人先生に、「何で日本の大学はランキングがそんなに低いのですか」と聞いたら、こう答えていました。「理科系だけ取れば、工学、物理、理科など世界のベスト３に入る日本の大学は幾らでもあります」と言われました。外国語の論文の数が評価の基準になるのだそうで、「文化系の先生たちが外国語で論文を書かないからランキングが落ちているだけで、大学の質は素晴らしいですよ、自信を持っていいです」と叱られたことがありました。「ありがとうございます」と言って、それで少し自信が戻りました。

宮城先生はお芝居をやっていて、言葉が英語でなくてもいいでしょう。

宮　城　委　員：　僕もさすがにアメリカ人を演出したときには英語が急激に上達しました。本当に必要になれば、日本語で考えていても、それを英語でどういうふうに言えば通じるのかを考える力さえあれば、大人になってからでも何とかなると、僕は思いました。

矢 野 委 員 長：　先ほど仲道さんが御指摘されたことを論議していないのですが、知性を高めるのと人間力を高めることは同じことなのかとおっしゃいました。

同じならばという前提で、いろいろお話がありましたが、私の乏しい知識ですが、知情意という言葉がありますので、知だけではだめだと思います。

岡潔という大数学者がいて、世界トップクラスの知性を持っているのですが、「数学は情緒です」と言っています。これは大変なことです。仲道さんがおっしゃったように、音楽を聞くことで情緒が高まりますので、それをおっしゃっているのだろうと思って、思い出しながら伺っていました。

ですから、この「知性を高める学習」は、人間力のある一部分、しかも重要な一部分だと思います。ですから、それ自体が低いと問題がありますから、どうやって高めたらいいか。学力にもいろいろな基準があると言われればもっともです。

今日はいろいろなヒントがあったと思います。先生も教育しなければいけない、親も教育しなければいけないですね。それから、もっと幅広く教養を高めた上で、知性も伸びていくのかもしれません。

加　藤　委　員：　私はこの連休中に、アジアの高校生たち100人を選抜するために、アジア各国を回ってきたのですが、向こうの国の方々から、日本で教育を受けさせたいと言われました。日本に行ったら物すごくいい人間になって帰ってくると言うのです。

それを“discipline”と言っていました。道徳と訳していいのかどうかわかりませんが、人間的に、きちんと挨拶ができたり、食事が始まるときに「いただきます」と言う。そうすると「いただきます」とはどういう意味なのかと聞かれます。「命をいただくというところから始まっているのよ」と答えると、琴線に触れるのでしょうか。だから、日本人と仕事がしやすいというのは、まさしく今も、それは脈々と続いていると思います。これは日本の良いところで、自分が発言することとともに、聞く能力があるということが、日本人の一番良いところではないかと思います。それは、100年、200年の教育の賜物だと思います。

私が今日の議論を聞いて思ったのは、先生たちが忙し過ぎるのではないか、だから余裕がないので、それを改善する良い方法はないかと思います。

私たちの高校や中学の時代は、授業が少し脱線することがあって、そ

ういうときに先生が話してくださったこと、歴史の授業などは、いまだに自分の中にあります。

私の学校は、毎週水曜日が休みで、1年間自分で研究テーマを決めて、最後の先生も自分で選んで、毎年必ず卒論のように発表する機会がありました。

公立学校では、そういう時間は難しいかもしれませんが、先生方のフリーハンドというのが少なくなっていて、自信を失くしたり、仕事に追われる感じになっているのをどう解消していくのかを少し付け加えさせていただきたいと思います。

矢野委員長：　ありがとうございました。

それでは、渡部さんどうぞ。

渡部委員：　先ほど委員長がおっしゃっていた、近頃の人たちはコミュニケーションが苦手だということに関して、もしこの近頃の人に私ぐらいの世代も入るのならば、もしかしたら意味のある発言ができるかなと思っての発言なのですが、コミュニケーションが苦手ではなく、多分コミュニケーションの仕方が世界中で変わってきているのだと思います。仕方もですが、スピード感もです。

加藤さんもおっしゃっていたように、海外と無料でつながれるから、フェイスブックやツイッターなどをやっている若者にとっては、時差があることは当たり前の感覚としてあります。

そして、私は東京で、難民の人たちの仕事をつくる仕事をしていますが、高校の調べ学習で、今、難民問題を研究していて、それで知りたいことがあるから、質問していいですかと言って、直接、中高生からメッセンジャーが来るのです。一昔前、私が中学生の頃はフェイスブックがなかったので、そういう団体があることを調べるのが難しかったのかもしれませんが、その代表に直接メッセージをするという手段は絶対持ち得ていませんでした。

普段はツイッターやフェイスブックで遊んでいるように見えるかもしれませんが、すき間すき間にすごい能力を発揮している瞬間があるのです。

親が提供できない、親が学歴だけではなく、触れている情報であったり職種であったり、いろいろな制限の中で提供できない情報や、学校や市役所のポスターには貼っていない情報を自分で探して参加してくる中学生がいます。ホームページを見て、フェイスブックから飛んでグーグルホームで申し込みをしてくるというのは、すごいコミュニケーション能力だと思います。

なので、お互いにコミュニケーションが取れていないと思いがちなのだろうなと、私も10歳下の人たちとしゃべるときも、20歳上の人たちとしゃべるときも、両方とも感じます。

その代わり、目の前の人とのコミュニケーションをどう取るかは、私たちより上の世代のほうが抜群に優れていると思います。田舎のおばあちゃんのコミュニケーション能力は、本当にすごいと思います。こちらが返答していないのにもかかわらず、すごく人の懐に入ってくるようなコミュニケーションができる。あれは多分20代はできなくて、年を取ればできる話なのかもしれないですが。

だから、デジタルネイティブではなかった人たちが、ＩＣＴ、ＩｏＴのコンピューターの能力でデジタルネイティブに勝てるわけではないけれど、だからこそ教えられるというものを、お互いにリスペクトしながら補完し合って、それがいらっとくるときに、笑い話にできるようになったらいいのではないかと思います。

新卒の人とどうやってコミュニケーションを取ればいいかわからない事業所の社長さんとのコミュニケーションも、そういう勘違いの勘違いがいざこざを生んでいる瞬間に触れることが多かったので、何かそれが学校の先生と生徒がそうなのか、親と子供もそうなのか、地域の中でもそうなのか、コミュニケーションの仕方がトピックになっても面白いディスカッションになると思いました。以上です。

矢 野 委 員 長： 大変貴重な御意見をありがとうございました。

余り思い込みをしないで、物を見ていく必要がありますね。ありがとうございました。

それでは、大分時間が迫ってまいりましたので、どういうふうに今日の議論をまとめるかは、これからの作業としまして、総合教育会議の場で披露させていただくことにいたします。

今回は、問題提起が山ほどあったという認識がありますが、どういう答えを出すか、ここで決めることはできないものもありますので、時間をかけてやっていきたいと思います。その内容のまとめ方は、委員長と副委員長と事務局にお任せいただきたいと思います。

それでは最後に、知事から一言お願いします。

川 勝 知 事： どうも長時間にわたりまして、今回もありがとうございました。

有徳の人をつくる、徳という漢字を日本が入れたのはいつぐらいでしょうか。五、六世紀のことだと思いますが、漢字が発明されたのはもっともっと昔です。しかし、この国は入れなかったのです。どうして入れなかったのかなと思います。縄文の時代は１万年以上あります。そして魏志倭人伝ではないですが、倭人という連中がいると。それは朝鮮半島も入っていて、一部、中国の沿岸も入っています。そのあたりが漢字の文化圏なのです。だけど、漢字を使わないのです。

では、それはたまたま海を渡ってこなかったからかというと、一番古いのが恐らく福岡県の志賀島で出た漢委奴国王の印です。西暦57年、後漢の光武帝という方が、奴の国王におまえを国王に任ずるという印鑑で

す。したがって、その意味はわかっているはずだから、知っているのです。だけど、使わないのですね。なぜ使わなかったのか、本当に不思議です。

それは、もし何か書いてしまえば、言霊が失われたからではないかと。神に祈るとか、あるいはコミュニケーションをして、その人に伝えるということをしているのが、書いてしまえば、そこに込められた魂というか、命というか、それが消えると思っていた節があります。

しかし、漢字が入ってきて、その中で、矢野さんは論語ですから、論語の中で一番重要な一字を、もし当てるとすれば「仁」かもしれません。仁義礼智信とか忠とか孝とかいろいろありますけれども、これは全部、僕は徳目だと思います。徳の中の一つでしかないと。全部これを入れるとすれば、これは徳になると。

だから、何も誰も教えてもらわないのに、失敗するとみんな「不徳のいたすところだ」と言うのです。だから、徳はないといけないのです。「不徳のいたすところ」と言うような場面をつくってはいけないのです。では、徳とは何ぞやというと、これはなかなか難しい。しかし、そういう類いのものであります。

そして、人間は、心と身体から成っていますから、これは不即不離のもので、両方とも大事だと。心という中の一つに、確かに知性があるのです。ホモ・サピエンスですから、反省できる、離見の見というか、自分は何をしているかがわかるという独特の能力を我々は持っています。それとコミュニケーションは、花とだってできるし、動物とだってできます。

そこには言葉ではなくて情といいますか、あるいは気持ちというか、知情意というのがある。これが心全体を指すものだと。だけど、知情意は全部漢字です。心という漢字と、こころという平仮名で、漢字で心（シン）という字はどう読んだって音でココロと読めないでしょう。だから、心に似たような言葉は、縄文時代に使ったかもしれません。だけど、それがこの心に入っているかというと、入っていないかもしれません。

夏目漱石の「こころ」は、最初は漢字で書いていたそうです。ところが、最後は「こころ」と平仮名にしました。

だから、心と入ると、道徳的な道義心や規則が入ってくるのです。それからはみ出すものがあると思います。だから、そういう情みたいなものは心の中に入っているわけです。

情はどうしたらいいか。そうすると音楽を聞く、演劇や絵を見る、あるいは自然を散策するなど、勉強することとは違うわけです。

それでは、意というのは何だと。これもまた難しいです。意志とか意欲、これがないと、どんなに頭がよくても、やる気がなければ絶対だめです。やる気の気がしっかりと一定方向に向かう意志です。これは運動しないと鍛えられないでしょう。あるいは何事も継続して挫折しないと。

そういう意味で、文武芸なのです。文は知性、どちらかというと知で

しょうか。武はスポーツですが、これは意を鍛える。芸は情を鍛えるというか豊かにする。そういう意味で、大まかに言っているだけで、全てのものが大切ですよと言っているにすぎません。

だから、何も言っていないのに等しいかもしれませんが、それは知性が大切で、だから知性が極めて高い人を尊敬する気持ちがないといけない。自分は知性が高くなくても構わない。英会話や学校の成績は全然だめでもいいと。

そして、文武の武。スポーツはむちゃくちゃできる人がいる。これはもう天性のものです。自分は下手だと、あるいはどこか身体に障害があると、だけどスポーツが大好きだ、素晴らしいと思う人がいる。

芸術も、チェロも弾けない、ピアノも弾けない、だけどそれを本当に美しいと思うと。だから、無芸大食で、だけど芸術を愛している人がいる。

そういう意味での文武芸なのです。だから、一人で全部持っているような万能の天才は、望むべくもないと思っております。

そして、私は日本の知性というのは、言ってみれば縄文の時代からあると思います。仏教も儒教も洋学も入ってきていますから、ある意味で全部あるので、全体としては非常にレベルが高い。これは人類の知性が入っていると思ったほうがいいと思います。人類の知性が何らかの形で、日本の二千数百年の中に入っていると。だから、これはしっかり教えないといけない。

脳の生理的な発達がありますから、10代の前半ぐらいまでにしっかりと教え込まないといけない。その教える先生に能力がないのは問題外ですけれども、下手だったりすると具合が悪いし、忙しいのは論外であります。だから、15歳までが極めて重要なので、先生が忙しいならみんなで助けようということです。

高校では、学習、勉強時間が少ないと。要するに、僕も勉強なんてしていません。ほかのことをやっています。恐らく清宮さんだってそうでしょう。もうラグビー一辺倒でしょう。あるいは別のことに夢中で、何で学校でやっていることをわざわざ２回も３回もやらなくてはいけないという感じですよね。

ですから、高校のときに皆勤の人が一番偉いのです。本当に、何であんなところに行かなくてはいけないのかと、思っている人だっているのです。だから、もう高校になったら自立していると思って、その前に何で自立させるかを本当に大切に、宝物として教え込んでいくことが大切です。

ただし、必ず習熟度が低いとか、落ちこぼれと言われる人がいます。初めからそれがわかっている人がいる。そこが一番大切です。そこは何か持っているのです。その人に代わる人はいないのです。

だから、落ちこぼれという言葉が良くないと思いますが、その人の個性を生かすことは前提の上で、良いものを持っている個性は徹底的に伸

ばすと。何で高校まで行ってからでしか、数学は理学部に行けないのかと、もう16歳で行けばいいじゃないかと思います。

教育委員になった加藤百合子さんが、数学が大事だと言っている。だけど、本当に数学が嫌いな人がいます。数を見ただけで、数式を見ただけで嫌だという人がいるじゃないですか。数学が好きな人は、初めから数学でばあっといけばいい。高大連結ではなくて、もう中大連結でいいです。天才はつくるべきです。天才的能力を持っているのは、人類のかけがえのない大輪の花ですから、これは伸ばさなければいけない。藤井君は、大谷君は、幸太郎君は、もうばんばんやればいい、私はそういう考えです。

そういう教育論の議論は幾らでもできますが、ともかく知性を高めることが大切だと、その中身はやはり教養なのです。教養は人類のつくり上げた知の資産です。これを日本は持っていますので、これをできる限り子供たちに共有させていく必要があります。

音楽も実は知的です。演劇もそうです。絵画もそうです。どこかそういうものがあるのです。これは動物にはできないものです。ほかの動物には、残念ながらできにくいものですね。ですから、こうしたものを捉えて、どういうふうに知性を高めていくか、そのやり方を一緒に考えていきたいと。

こんなところに書いているじゃないですか。官立の大学私学の雄、こういう場はもういいと、世の中で通用する知性の資格は、ＢＡ、つまり学士号、それから修士号と、Ｐｈ．Ｄ.です。

どこの高校を出た、浜北を出たとか、静高を出たとか、そんなものは関係ありません。そう思っていますから、どこの大学を出てもいいと思っています。そういうところに子供たちが行けるようにしてやるのがいいと。

ただし、大学はほんの一部の人たちだけでもいい。50％しか勉強しないと出ているではないですか。ほかのことに関心があるのです。勉強しない人が50％もいるな、大したものではないかと夢を持って、この統計の数字を見直したいものだと思います。そういう感想でございます。

矢野委員長：　どうもありがとうございました。

それでは時間になりましたので、本日の会議はこれで終了します。

事務局：　皆様、長時間にわたり、ありがとうございました。

次回、第２回の実践委員会は７月19日の開催を予定しております。詳細につきましては、後日事務局から御案内を差し上げます。

以上をもちまして、第１回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を終了いたします。皆様お疲れさまでございました。